

# ハリウッド的殺人事件

2004(平成16)年3月21日鑑賞(ホクテンザ)



監督＝ロン・シェルトン／出演＝ハリソン・フォード／ジョシュ・ハートネット／レナ・オリン／ブルース・グリーンウッド／イザイア・ワシントン（ブエナ・ビスタ・インターナショナル（ジャパン） 配給／2003年アメリカ映画／115分）

……今年観た映画の中で一番のバカバカしさ。二股稼業のロス市警殺人課勤務の2人の主人公もおふざけなら、犯人追っかけのカーチェイスやママチャリの活用、ビルの屋上で手に汗にぎる(?)どつき合いもおふざけ。わざわざ「ハリウッド的」と冠をつけても、ハリウッドの魅力は何も浮かび上がってこない。見えるのは悪趣味的なおふざけのみ。『スター・ウォーズ』『インディ・ジョーンズ』そして『エアフォース・ワン』と続くアクション俳優の名にこだわっているのかもしれないが、ハリソン・フォードも60歳を過ぎたのだ。大きなお世話ながら、ちょっと役柄を洗めに修正してみても……？

## 第5章

映画のよしあしは俳優で決まる！

### 2人の主人公はそろって二股稼業

ベテラン刑事のジョー・ギャヴィラン（ハリソン・フォード）と駆け出しの刑事のK.C. コールデン（ジョシュ・ハートネット）は、ともにロサンゼルス市警の殺人課に属する身分。

ところが、今やギャヴィランは不動産仲介の副業(?)に忙しく、K.C. はヨガ教室のインストラクターの副業(?)が忙しい。

この2人がそれぞれ自分の副業に精を出しているまっ最中、そのケイタイが鳴り呼びがかかった。ライブハウス内で演奏中の4人の人気ラップ・グループの射殺事件が発生したためだ。ギャヴィランは10分以内に、K.C. は7分以内に駆けつけるといって、殺人課の現職の刑事がこんな大っぴらな副業(?)をやっているの……？

私は弁護士が本業だが、「二足のわらじをはきたくて」ということで、数年前から映画評論家(?)との二股稼業を目指している。しかしこれは、私の人生観と趣味にもとづく私の自由な選択。しかし公務員である刑事に、こんなことが許されるはずはない！

しかもなぜかこの映画では、ギャヴィランとK.C.がこのように二股をかけていることが「自慢」で「売り」らしく、捜査中、あるいは犯人追っかけのカーチェイス中にも、ギャヴィランのケイタイが再三鳴り、600万ドルを攻防戦とする豪邸売買の仲介が最終的に成立するという「おまけ」までつくありさま。ちょっとおふざけもいい加減に……と言いたくなるが……。

## 女性関係の乱れ(?)もドッコイ・ドッコイ

何でもギャヴィランは、3度の離婚経験をもつという立場で、あまり褒められたものではない。ギャヴィランが今つき合っている相手は霊能力者のルビー(レナ・オリン)だが、このルビーは、今はギャヴィランの宿敵となっているベニー・マッコ(ブルース・グリーンウッド)とつき合っていた女性。

マッコがギャヴィランの宿敵となったのは、ギャヴィランがマッコの捜査ミスを暴いたため。マッコは今は捜査内務調査部に配属されているから、あの手この手でギャヴィランの「公費使い込み」を暴こうと必死になっている。ギャヴィランも3度の離婚歴をもつベテランなのだから、何も、そんなマッコの元彼女とつき合わなくてもいいのに、と思うのだが……。

他方、若くてハンサムなK.C.も、女たらしの点はギャヴィラン以上にバッチリ。ヨガ教室には若くて魅力的な女性たちがいっぱい！ よりどりみどり。今日は家に帰ると、1人の美女が裸でお風呂の中で待っているというハッピーさ……？

## 何ともバカバカしい追っかけ劇

この映画は、『ハリウッ德的殺人事件』というタイトルにもかかわらず、「犯人捜しの妙」は何もない。ちょっと調べていけば、被害者のグループが属していたレコード会社の社長のサルテイン(イザイア・ワシントン)が怪しいことがわか

り、すぐにそのウラも取れた。犯人に迫るのが遅くなったのは、2人とも副業や女性関係に忙しいためだ。

そこでやっと犯人捜しとなったが、既にサルテインは逃走し、行方不明。さてどうするか？

そこで登場するのが、ギャヴィランの彼女であるルビーの心霊術。半信半疑でルビーについて行ったギャヴィランは、何とそこでサルテインを発見。そこから派手だが何ともバカバカしい犯人追っかけ劇が……。

最初はよくあるカーチェイス。それぞれ自分の車を使っただけのカーチェイスの後、自分の足を使っただけの追っかけっこ。その後、再度市民の車を取りあげてのカーチェイス。そして地下鉄に逃げ込んだサルテインを追うギャヴィランは、市民の自転車（ママチャリ）を奪い、これに乗ってサルテインを追っかけ（なぜ地下鉄で逃走したサルテインを地上から自転車で追っかけて見つけられるのかというバカバカしさはさておいて……）、その後は2人だけの追っかけ劇と格闘劇。そして遂に……。

一方、サルテインの相棒の元警察官のリロイ・ワスリー（ドワイト・ヨークム）を追っかけたK.C.は、追っかけているところを足をひっかけられて転倒。立場が一挙に逆転となったが、そこは演劇で鍛えた迫真の演技力で命乞い……。ちょっと躊躇したワスリーの間をみつけて再逆転し、容赦なく手足をピストルで……。ちょっとズルイやんか……？

## 何がハリウッド的なのか？

映画の冒頭、おなじみの切り立った山の上にある「H・O・L・L・Y・W・O・O・D」の看板が……。

ハリウッドはロサンゼルス市の北側に位置する丘陵地帯。ハリウッドのまちには、昔からのハリウッド大通り周辺のハリウッド・エリアとその西にあるウエスト・ハリウッドエリアがある。さらにその西にあるのが多くのスターたちが住んでいる有名なビバリーヒルズだ。

この映画には「ハリウッド的」という冠がついており、パンフレットには、この「ハリウッド的」の意味するものがいっぱい解説されている。

確かに、ラップスターたちやロス市警、そしてギャヴィランが売買を仲介する600万ドルの豪邸の持ち主はオスカー候補となった人物のものなど、ハリウッド的な要素をいっぱい詰め込んでいることはわかるものの、それが一体どうしたの……？

## ハリソン・フォードの狙いは？

古くは1970年代の『スター・ウォーズ』シリーズや1980年代の『インディ・ジョーンズ』シリーズで一躍大スターとなったハリソン・フォードは、シリアスな役からアクションものまで、何でもこなせる名優。

最近では『K-19』(02年)がシリアスものだし、『エアフォース・ワン』(97年)がアクションもの。しかし彼は1942年生まれだから既に62歳。「老境(?)」にさしかかってきたと言っても失礼だが、やはりそれなりの年になってきたのは確か。

パンフレットによると、この映画は、アルバイトをやっているロス市警の主人公というコンセプトが面白くてハマったとのこと。つまり、彼がこれまで演じた数多くの作品の主人公のように、「立派なヒーロー」ではなく、借金まみれで女性関係にもだらしなく、犯人追跡中も不動産仲介の仕事に忙しいという、やんちゃな悪ガキ主人公の役柄が気に入ったということだ。

しかしこの映画はちょっと悪ノリしすぎ！ 主人公のキャラもちょっとタチが悪いうえ、追っかけのアクションにもかなりムリがある。自転車ママチャリを奪って迫るシーンは、「もちろん僕のアイデア」らしいが、最悪！ 誰か周りのスタッフが、ちゃんとハリソン・フォードに言ってやらないと……。本人はなかなか自分ではわからないものだろうから……？

ビルの屋上でのサルテインとの2人だけの「決闘」も、老齡のハリソン・フォードにはちょっとムリがある。足元がよたっているギャヴィランが、若いサルテインに本来勝てるはずがない。

そう思えるシーンも当然いくつかあるものの、結果はもちろんギャヴィランの勝ち。ああ、バカバカしい……。

## 妙なノリのラスト、そしてまたしてもケイタイが……？

ラストはK.C.の『欲望という名の電車』の舞台。これはテネシー・ウィリアムズ原作の名作中の名作で、私も学生時代に何回も読んだもの。日本では文学座の杉村春子の<sup>オハコ</sup>十八番の舞台。

そこに出演しているK.C.が舞台の上でドタバタ劇を演じている。つき合いで観に行くことを約束させられていたギャヴィランは、事件解決の後、ルビーと一緒にそのわずかしかない観客席に。

そんな時、舞台で演じているK.C.のケイタイが鳴り響いた。そして続いてギャヴィランのケイタイも。舞台上演中はケイタイを切っておくのは、どこの世界でも常識！ そんなルールも守れないロス市警はそれだけで刑事失格！ ところが、何と舞台出演中のK.C.は、舞台の上でそのケイタイをとったうえ、あと何分で現場へ行きますと回答し、舞台をスッポかしてしまった。そして、同じ連絡を受けたギャヴィランも同じ行動。

そしてこの刑事コンビは次の殺人事件の現場で、腹ごしらえのピザを注文しながら、先ほどの演劇の批評……。

ここまでムリにふざけなくてもいいのでは……？

## 総評

カーチェイスの途中からバカバカしくなりながら観ていたが、ラストのおふざけは最悪！

何で天下のハリソン・フォードがこんな映画をつくるの？ と唾然としながら観ていたが、それもこれも、キッチリと評論を書かなければ、という思いから。だからしっかりと書いておこう。この映画は今年私が観た映画の中で一番の駄作だった、と。

ハリソン・フォードには、名誉挽回の次作を期待したいものだ。

2004(平成16)年3月22日記